

イタリアのファッションにおける ジャポニズムの始まり

ボローニャ大学 ラウラ・ディミトリオ

THE BEGINNING OF JAPONISME IN ITALIAN FASHION

Laura DIMITRIO, University of Bologna

The Japonisme, which originated in the late 19th century in France, reached Italy at the end of the same century. The Japanese aesthetics and art influenced the various areas of Italian culture. Its influence on fashion, which began with the kimono boom in the 1880s in France, arrived in Italy in the early 20th century. Because it was comfortable to wear, kimono was favored by women of the upper class as a housedress. At first there was no store in Italy that directly imported kimono from Japan, and ready-made kimono were imported from France. However from the beginning of the 20th century, housedresses that imitated the kimono silhouette and decorative patterns were produced in Italy.

Later, Japanese patterns started to be reproduced on Western fabrics. Woven fabrics that had Japanese-style decorative patterns were produced in Italy, and dresses from such fabrics were produced. In addition, new clothing using kimono-specific linear silhouettes and flexibility was designed. In Italy, Mariano Fortuny and Monaci Galenga were leaders of such production. Especially Fortuny researched into the silhouette of Eastern clothing, including Japanese decorative patterns and techniques of stenciling, and designed clothing based on this knowledge.

The Japonisme in Italian mode faded away near the end of 1920s as it did in other countries. It was not until the 1970s that Japan made an impact on the western fashion next, specifically when Kenzo Takada, Issey Miyake and Kansai Yamamoto appeared.

1. 序論：イタリアにおけるジャポニズムの始まり

「ジャポニズム」という用語は、西洋の国々で見られた日本文化の発見と吸収のプロセスを指している。19世紀後半にフランスで始まったジャポニズムは、イギリス、ドイツへと広がり、その後19世紀末にはイタリアにも及んだ。1902年、トリノで開催された「Esposizione Internazionale delle Arti Decorative（国際装飾芸術博覧会）」では、日本への熱狂がいかに激しいものか知ることができた（註1）。その後も日本の美学と芸術は、イ

タリア文化の様々な領域（絵画、家具、文学、演劇、ファッション、そして園芸までも）に影響を与えた。

イタリアにおけるジャポニズムは、2003年に詳細な研究が行われ、アドルフォ・タンビュレロ編による2巻本『Italia - Giappone 450 anni (イタリアと日本の450年)』としてローマの国立アフリカ・東洋研究所とナポリ東洋大学から出版されることとなった(註2)。最も興味深い論考が、ロベルタ・ボリヨーネによるイタリア絵画におけるジャポニズムについてのものであることに間違いない。彼女は日本美術の様式と図像に影響を受けた画家をすべて取り上げており、その中でも名が知られているのが、ジュゼッペ・デ・ニッティスである(註3)。ボリヨーネの指摘によれば、20世紀初頭、日本の影響はグラフィック・アート、特に広告用ポスター（例えばナポリのメレ百貨店のものなど）にまで広がっていた。

実際、イタリアにおけるジャポニズム、特に1920年代までは、さまざまな芸術形式を内包する流行現象で、エリート層だけでなく大衆文化にも影響を与えていた。この一つの例として、1904年、肉エキス製造会社のリービツヒ社が、イタリア人顧客に日本の風景を描いたカードを贈呈したことが挙げられる(註4) (Fig. 1)。

19世紀末のイタリアで、日本が流行していた証拠として忘れてならないのは、1896年、イタリアで最も重要な全国紙『Corriere della Sera (コリエーレ・デッラ・セーラ)』が年間購読者数を増やすために行ったキャンペーンの一環として、着物姿の日本女性のポスターを発行したことである (Fig. 2)。

2. イタリアのファッションにおけるジャポニズム

イタリアでは、国内のファッションにおいてジャポニズムがいつどのように始まり、その後いかなる発展をしていったのか、広範囲に及ぶ調査は行われていない。唯一、ローマのソフィア・ニョリが、2003年に短い評論『La moda tra Oriente e Occidente: Giappone, Europa, Italia (東洋と西洋のファッション：日本、ヨーロッパ、イタリア)』を出しただけである。ここでは、イタリアのファッションが日本から非常に大きな影響を受けた時代は、1970年代と80年代だったと述べられている(註5)。とはいいいながら、イタリアにおいて、1996年のパリの「Japonisme & Mode (モードのジャポニズム)」展での調査に匹敵するものが行われていたわけではない(註6)。

その展覧会のカタログに掲載された論考の中で、深井晃子は、西洋ファッションにおけるジャポニズムの発展を4段階に分けてとらえている。異国趣味の衣服としての着物を紹介する第1段階、日本の文様を模倣した生地を製作する第2段階、「着物の造形性を発見

する」第3段階、最後に、日本の美学を自由に解釈する第4段階である(註7)。

イタリアのファッションにおいても同様に、こうした流れを見い出すことができるが、1つ1つの段階に、はっきりした時間的な区分けがあるわけではない。それでもイタリアのファッションは日本に、とりわけ日露戦争(1904-05年)後の日本に影響を受けたといえることができる。

次節以降、ジャポニズムがイタリアのファッションに及ぼした影響を、最初の3段階について述べていきたい。

2-1. 異国趣味の衣服としての着物の紹介

1880年代にフランスに到着した「着物ブーム」は、20世紀初めよりイタリア女性、とりわけ上流階級を魅了した。日本の伝統衣装はその着心地の良さからもてはやされ、もっぱら部屋着として愛用された。

イタリアには直接日本から着物を輸入している店はなく、フランスから既製服を輸入していた。雑誌『La Scena Illustrata. Rivista Quindicinale di Arte e Letteratura (イラストレーション・シーン アートと文学の隔週刊行誌)』では1908年から1912年の間、ほぼすべての号で「キモノ・サダヤッコ」の広告が登場し、パリのミカド店から購入し、郵送してもらうことができた(Fig. 3)。

特に中流から上流階級のイタリア女性は、自宅のプライベートな空間において着物を着るようになった。この着こなしは、1903年にパレルモで撮影された「ゲイシャ」と題する写真に見ることができる(註8)(Fig. 4)。この写真には、英国系シチリア人で有産階級のアリス・モード・ガードナーが、2人の友人と1人の子供と共にお茶会をしている様子が写されている。写真のいたるところに日本の影響を見ることができる。大きな扇子、左の婦人が持つ日本人形、背景にある花と動物のモチーフで飾られた屏風などだ。3人の婦人は日本風の衣服を身に着けている。しかし、彼女たちの着物のスタイルを見ると、簡素で、日本の着物に典型的な装飾文様がないことから、その服はオリジナルではなく、イタリアの模造品だと考えることができる。さらに婦人達は打ち合わせた部分をきっちりと重ねないヨーロッパ式で着物を着ている。

実際、イタリアでは、20世紀初頭から着物を国内で直接製造するようになっていた。1910年から20年頃のイタリアの婦人雑誌では、着物のシルエットと装飾文様を模倣したイタリア製の部屋着を見つけることができる。例えば、1913年に出版された婦人誌『Corriere delle Signore (紳士通信)』には、長く幅広の袖が付いた、ブロード製の部屋着が登場する。日本の帯によく似た腰高のサッシュを締め、当時、ヨーロッパでは日本の

典型的な装飾文様と考えられていたツバメがあしらわれている (Fig. 5)。

深井晃子が指摘しているように、オペラと演劇によって、着物を着る場面がより一層広がっていくこととなった (註9)。1870年以降、フランスでは、日本をテーマにした数多くの戯曲がオペラや演劇のために創作された。この流行はイタリアにも広がり、当時最高の作曲家の2人であるピエトロ・マスカーニとジャコモ・プッチーニが、日本をテーマにした作品を作曲した。ピエトロ・マスカーニはオペラ『イリス』を書き上げ、この作品はローマのコンスタンツィ劇場で1898年に初演された。ジャコモ・プッチーニはオペラ『蝶々夫人』を作曲、1904年にミラノのスカラ座で初演された。

評論家の言を借りれば、『イリス』で描かれている日本のイメージは空想上の国であり、『蝶々夫人』で描かれているイメージは事実に基づいたものだった。実際、プッチーニは日本の伝統音楽を研究し、日本的な音と旋律を作品に取り入れている (註10)。文献に丹念にあたるのが、プッチーニにひらめきを与えたように、このオペラの衣装デザインを担当した画家、ジュゼッペ・パランティもまた、同じような手法でアイデアを引き出していた (註11)。残念ながら『蝶々夫人』初演の衣装は保存されていないが、スカラ座博物館にはパランティによる衣装のデザイン画が73枚保存されている。

『蝶々夫人』の舞台は日本であり、登場人物のほとんどは伝統的な日本の衣装を着ている。そうした衣装、特に女性たちが着用する着物は、本物そっくりのデザインになっている。というのも、菖蒲、菊、牡丹、竹、トンボ、鶴、扇といった日本の装飾文様や、日本の衣服に典型的な全体の飾り付けの仕方をうまく再現している (註12)。

例えば、衣装のデザイン画 No.36 には着物姿のコーラス団員が描かれている。裾にはクローバー畑があり、細い蒲の茎がトンボ紋の帯まで伸び、その上には青空に浮かぶ雲を見ることができる (Fig. 6)。

ここでは、蒲の茎が草地の緑と空の青を調和させて、着物全体の統一感が生み出されている。男性の衣装にも同様の類似点が見られる。ジュゼッペ・パランティは一度も日本を訪れたことはない。しかしながら、日本の服装、そして日本の芸術に対する深い造詣があった。これは彼が日本の文化を研究していたからこそ可能であった。日本について、当時出版されていた数多くの出版物を調べ、そこにある図版を『蝶々夫人』の衣装デザインのインスピレーション源として利用した。例えば、二人の男性コーラスの衣装には、1870年、ミラノで出版されたピエトロ・サビオの本『La prima spedizione italiana nell'interno del Giappone e nei centri sericoli effettuatisi nel mese di giugno dell'anno 1869 da sua eccellenza il Conte De la Tour (1869年6月、ラ・トゥール伯爵によるイタリア人初の日本内陸部と絹生産地への訪問)』の図版が使われた (Fig. 7)。

ジュゼッペ・パランティは文献に細かく目を通しながら、可能な限り日本の着物に似せた衣装をデザインすることを目指していた。これはジャコモ・プッチーニが日本の伝統的な旋律の再現を目指したのとまったく同じことである。

2-2. 日本の絵模様を模倣した生地

深井晃子によると、西洋ファッションにおけるジャポニズムの発展の第2段階は、日本の文様を生地に再現することだった。この動きによって、花（例えば、菊や菖蒲）、動物（例えば、ツバメや鶴）、他にも雲、波、滝といった題材を基にした新しい柄のレパートリーを取り入れていくようになった。フランス、特にリヨンで1880年から1920年の間に製造された生地は、この流行を物語っている（註13）。

イタリアでも同じ頃、生地にあしらわれた日本の装飾文様が広がりを見せたが、必ずしも西洋衣装の伝統的なシルエットを修正するものではなかった。例えば、1885年、雑誌『Margherita（マルゲリータ）』では、スカートに小さな扇紋をあしらったドレスが紹介されている。また、1902年、雑誌『Corriere delle Signore』は赤い絹糸で菊を刺繍した服を紹介している。

日本の文様がイタリアにおいて使われ続けるのは、1920年代、コモのシルク工場のオーナー、グイド・ラバシが、日本の伝統文様から発展させたデザイン画からさまざまな記事を製作していた時期までである（註14）。例えば、1923年には蝶柄を織り込んだ生地やしだれ柳をあしらった織物が製作されている（Fig. 8）。蝶もしだれ柳も日本の伝統的な装飾文様である。日本では蝶は陶磁器の装飾模様としても使われていた。しだれ柳は日本文化において優雅さの象徴と考えられていて、平安時代には歌人によってその美しさを愛でる和歌が詠まれている。

図版からもわかるように、この生地デザインは曲がった木の幹を特に強調していて、一見すると幹とはわからず、砕けた波のようにも見える。ここでは、19世紀末から西洋美術に多大な影響を与えた葛飾北斎の版画『神奈川沖浪裏』（1830-32年）の影響を見ることができる。しかもグイド・ラバシは日本美術に精通していた。ドイツでは日本愛好家の知識人と交流があり、また自らも日本の生地を収集していたからである。

2-3. 「着物の造形性の発見」

西洋ファッションにおけるジャポニズムの発展の第3段階は「着物の造形性の発見」であった。それは主に着物の直線的なシルエットとその柔軟性からくるものであった。

フランスではポール・ポワレが重要な役割を担ったが、イタリアでは2人のデザイナー

が最初に着物の造形性に着目した。マリアノ・フォルチュニイとマリア・モナチ・ガレンガである。多彩なスペイン人芸術家マリアノ・フォルチュニイ・イ・マドラーズ [1871-1949] は 20 世紀前半にヴェネチアで活動していた (註 14)。ファッションの分野では、特に古代ギリシアの衣服の研究や、チュニック・ドレス《デルフォス》、ストール《クノッソス》で知られている。しかし、彼は研究範囲を広げ、日本の装飾文様や型抜き染め技術、さらには東洋、特に日本の衣服のシルエットの研究まで含めていた。例えば、1910 年の茶色の絹ベルベット製イヴニング・コートには、多色の型抜き染めが施されている。生地デザイン (蝶、葵、立涌紋) だけでなく、その直線的なシルエット、大きな袖、重ね合わせの衿元も日本的な様式を彷彿とさせる (註 16) (Fig. 9)。

同年、フォルチュニイは白の絹製ガウンを制作した。日本の伝統文様が型抜き染めされ、シンプルなライン、長い衿、袖、そしてふきなどに着物との類似性がある (註 17)。

マリア・モナチ・ガレンガ [1880-1944] も、着物からインスピレーションを得て服作りをしていた。例えば、1922 年頃の黒のベルベットのイヴニング・コートでは、着物を模倣した振袖と厚みのある衿が見られる (註 18)。

3. 結論

1920 年代の終わり頃、イタリアのファッションにおけるジャポニスムは、ヨーロッパのファッション全般におけるジャポニスムと同様、次第に姿を消していった。日本が再びファッションに影響を持つようになるのは 1970 年代になってからである。フランスでは高田賢三、三宅一生、山本寛斎が日本のファッションへの興味を甦らせた (註 19)。イタリアではジョルジオ・アルマーニ、ジャンフランコ・フェレ、クリツィアがコレクションの中で日本に敬意を表した。今日においてもデザイナーの中には日本の文様からインスピレーションを得ている。例えば、ジョルジオ・アルマーニは、「アルマーニ・プリヴェ」の 2011-12 年秋冬コレクションを日本に捧げていた。

実際、ジャポニスムはイタリアのファッションの内と外に織り込まれた糸のようなものである。従って、直近の 2 つの世紀、そして現在にいたるまでのイタリアのファッションの歴史を本当に理解したいのであれば、日本が過去に与え、さらに現在も与え続けている影響を心に留めておく必要がある。

(翻訳：京都服飾文化研究財団)

<註>

1. M. Figioli, "La presenza del Giappone all'Esposizione internazionale d'arte decorative moderna in Torino

- 1902,” in *Torino 1902, Le arti decorative internazionali del nuovo secolo*, 1994, pp. 369-371.
2. *Italia-Giappone 450 anni*, II vols, by A. Tamburello, Roma-Napoli, 2003.
 3. R. Boglione, “Il fenomeno del giapponismo artistico in Italia: la pittura,” in *Italia-Giappone 450 anni* vol. I, by A. Tamburello, 2003, pp. 307-327. 以下も参照のこと：R. Boglione, “Il japonisme in Italia 1860-1900 – Parte prima,” in *Il Giappone XXXVIII*, [1998], 2000, pp. 85-113. R. Boglione Roberta, “Il japonisme in Italia – Parte seconda 1900-1930,” in *Il Giappone XXXIX*, [1999], 2001, pp. 15-47. ジュゼッペ・デ・ニッティスについては以下を参照：M. Moscatiello, *Le japonisme de Giuseppe De Nittis: un peintre italien en France à la fin du XIX siècle*, 2011.
 4. L. Dimitrio, “Figurine Liebig,” in *Riflessi, Incontri ad Arte tra Oriente e Occidente*, 2009, pp. 136-139.
 5. S. Gnoli, “La moda tra Oriente e Occidente, Europa, Italia,” in *Italia-Giappone 450 anni* vol. I, 2003, pp. 299-303.
 6. *Japonisme & mode*, exhibition catalogue (Paris, Palais Galliera-Musée de la Mode et du Costume, 17 April – 4 August 1996), 1996.
 7. A. Fukai, “Le japonisme dans la mode,” in *Japonisme & mode*, 1996, pp. 28-55: 29.
 8. *Mon Rêve. Fondo foto/grafico di Alice Maude Gardner (1860-1920)*, 1981, p. 58.
 9. A. Fukai, “Le japonisme dans la mode,” in *Japonisme & mode*, 1996, pp. 28-55: 38.
 10. 以下、参照：M. Girardi, *Giacomo Puccini. L'arte internazionale di un musicista italiano*, 1995, pp. 216-223.
 11. ジュゼッペ・パランティの活動と生涯については以下を参照：Giuseppe Palanti. *Pittura, teatro, pubblicità, disegno*, by V. Crespi Morbio, 2001.
 12. L. Dimatorio, “I figurini di Giuseppe Palanti per i costume della prima rappresentazione di ‘Madama Butterfly,’” in *Quaderni asiatici* n. 68, 2004, pp. 53-85.
 13. *Lyon en 1889: les soyeux à l'Exposition Universelle de Paris*, exhibition catalogue by P. Arizzoli-Clémentel (Lyon, Musée Historique des Tissus, December 1990 – March 1991), 1990.
 14. *Guido Ravasi. Il signore della seta*, exhibition catalogue (Como, Fondazione Antonio Ratti, 2008), by M. Bellezza and F. Chiara, 2008.
 15. フォルチュニの活動と生涯については以下を参照：G. de Osma, *Fortuny. The life and Work of Mariano Fortuny*, 1994.
 16. 彼のコートは以下の文献に掲載：Fashion. *A History from the 18th to the 20th Century. The Collection of the Kyoto Costume Institute* vol. II, 2011, pp. 357, 359 ; *Japonisme & mode*, 1996, pp. 69, 194.
 17. このガウンは以下の文献に掲載：Fashion. *A History from the 18th to the 20th Century. The Collection of the Kyoto Costume Institute* vol. II, 2011, p. 361.
 18. このイヴニング・コートは以下の文献に掲載：Fashion. *A History from the 18th to the 20th Century. The Collection of the Kyoto Costume Institute* vol. II, 2011, p. 428 ; *Japonisme & mode*, 1996, n. 19, p. 176. マリナ・モナチ・ガレンガと彼女が日本の型抜き染めの技術を研究した可能性については、以下を参照：R. Orsi Kandini, “Alle origini della moda italiana. Maria Monaci Gallenga,” in *Moda femminile tra le due guerre*, 2000, pp. 30-41:33.
 19. Y. Kawamura, *The Japanese Revolution in Paris Fashion*, 2004.

〈参考文献〉

- Boglione, Roberta, “Il japonisme in Italia 1860-1900 – Parte prima,” in *Il Giappone XXXVIII*, [1998], 2000, pp. 85-113.
- Boglione, Roberta, “Il japonisme in Italia – Parte seconda 1900-1930,” in *Il Giappone XXXIX*, [1999], 2000, pp. 15-47.
- Crespi Morbio, Vittoria, *Giuseppe Palanti, Pittura, teatro, pubblicità, disegno*, Torino – Londra – Venezia: Umberto Allemandi & C., 2001.
- Dimatorio, Laura, “Postille sulla nascita del giapponismo in Italia (I),” in *Quaderni asiatici* n. 67, 2004, pp. 27-56.
- Dimatorio, Laura, “Postille sulla nascita del giapponismo in Italia (II),” in *Quaderni asiatici* n. 68, 2004, pp. 9-52.
- Dimatorio, Laura, “I figurini di Giuseppe Palanti per i costume della prima rappresentazione di ‘Madama Butterfly,’” in *Quaderni asiatici* n. 68, 2004, pp. 53-85.

Dimitorio, Laura, "Le fonti dei figurini di Giuseppe Palanti per la prima rappresentazione di 'Madama Butterfly,'" in *Madama Butterfly di Giacomo Puccini*, ed. Teatro alla Scala, Milano, 2006, pp. 102-111.

Dimitorio, Laura, Marino Susanna, "Il giapponismo italiano," in *Riflessi, Incontri ad Arte tra Oriente e Occidente*, exhibition catalogue, (PIME Museum, Milano, 2009), Milano: Pimedit, 2009, pp. 100-148.

Fagioli, Marco, "La presenza del Giappone all'Esposizione internazionale d'arte decorative moderna in Torino 1902," in *Torino 1902. Le arti decorative internazionali del nuovo secolo*, Milano: Fabbi Editori, 1994, pp. 369-371.

Fashion. A History from the 18th to the 20th Century. The Collection of the Kyoto Costume Institute. by Akiko Fukai, Köln – London: Taschen, 2011.

Fukai, Akiko, "Le kimono et la mode parisienne," in *Kimonos Art Déco : tradition et modernité dans le Japon de la première moitié du XX siècle*, exhibition catalogue (Sarran en Corrèze, Musée du président Jacques Chirac, 15 July – 15 October 2006), Milano: 5 Continents, 2006, pp. 47-55.

Girardi, Michele, *Giacomo Puccini. L'arte internazionale di un musicista italiano*, Venezia: Marsilio, 1995 [Girardi Michele, *Puccini. His International Art*, Chicago: University of Chicago Press, 2000].

Guido Ravasi. Il signore della seta, exhibition catalogue (Como, Fondazione Antonio Ratti, 2008), by Margherita Bellezza and Francina Chiara, Como: Nodo libri, 2008.

Japonisme & mode, exhibition catalogue (Paris, Palais Galliera- Musée de la Mode et du Costume, 17 avril – 4 août 1996), Paris: Éditions des Musée de la Ville de Paris, 1996.

Kawamura, Yuniya, *The Japanese Revolution in Paris Fashion*, Oxford: Berg, 2004.

Lyon en 1889: les soyeux à l'Exposition Universelle de Paris, exhibition catalogue by Pierre Arizzoli-Clémentel (Lyon, Musée Historique des Tissus, December 1990 – March 1991), Lyon: Chambre de Commerce et d'Industrie de Lyon, 1990.

Mon Rêve. Fond foto/grafico di Alice Maude Gardner (1860-1920), exhibition catalogue by Giuseppe Bonini and Egidio Mucci (Prato, Palazzo Novellucci, September – October 1981), Firenze, Vallecchi Editore, 1981.

Moscatiello, Manuela, *Le japonisme de Giuseppe De Nittis: un peintre italien en France à la fin du XIX siècle*, Bern: Lang, 2011.

Orsi Landini, Roberta, "Alle origini della moda italiana. Maria Monaci Gallenga," in *Moda femminile tra le due guerre*, exhibition catalogue (Firenze, Galleria del Costume di Palazzo Pitti, 2000) by Livorno: Caterina Chiarelli, Sillabe, 2000, pp. 30-41.

Osma, Guillermo de, *Fortuny. The Life and Work of Mariano Fortuny*, London: Aurum Press, 1994.

Savio, Pietro, *La prima spedizione italiana nell'interno del Giappone e nei centri sericoli effettuate nel mese di giugno dell'anno 1869 da sua eccellenza il Conte De La Tour*, Milano: Fratelli Treves Editori, 1870.

Tamburello, Adolfo, *Italia-Guappone 450 anni*, II vols., Toma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente – Napoli: Università degli Studi di Napoli "L'Orientale," 2003.

〈図版〉

- Fig. 1. リービツヒ社のカード《日本の日常生活》 1904年 個人蔵
Liebig company's fogurine *Scene della vita al Giappone* (Scenes of Daily Life in Japan), 1904. Private collection.
- Fig. 2. ヴェスパシアーノ・ビグナミ 『コリエーレ・デッラ・セーラ』紙の広告用ポスター 1896年 ミラノ「アキレス・ベルタレリ」コレクション
Dvespasiano Bignami, sdvertising poster from the *Corriere della Sera*, 1896. Civica Racolta delle Stampe "Archill Bertarelli," Milano.
- Fig. 3. 「キモノ・サダヤッコ」の広告 『La Scena Illustrata』 1908年
Advertising for a Kimono Sada Yacco. *La Scena Illustrata*, 1908.
- Fig. 4. 着物姿のアリス・モード・ガードナーと二人の友人。「ゲイシャ」(1903年)
Alice Maude Gardner and two friends dressed in kimonos: *The Geishas*, 1903.

Fig. 5 イタリア製のブローケードの部屋着。日本の着物を模しており、装飾文様としてツバメがあしらわれている。
『コリエーレ・デレ・シニョーレ』誌 1913年

An Italian brocade house coat, which imitates the kimono, with swallows as a decorative motif. *Corriere delle Signore*, 1913.

Fig. 6 ジュゼッペ・パランティ 『蝶々夫人』初演衣装のためのデザイン画 No.36 1904年 ミラノ、スカラ座博物館

Giuseppe Patranti, Figurine no. 36 for the costumes of the opening of *Madama Butterfly*, 1904. Milano, Museo Teatrale alla Scala.

Fig. 7 ジュゼッペ・パランティ コーラス団員 『蝶々夫人』初演衣装のためのデザイン画 No.41 (左側) および No.47 (右側) 1904年 中央はピエトロ・サビオの本 (1870年) より、日本人通訳二人をえがいた版画。

Giuseppe Patranti, Figurine no. 41 (left) and 42 (right) for the costumes of the opening of *Madama Butterfly*, 1904. In the center, an engraving from the book by Pietro Savio, *La prima spedizione italiana nell'interno del Giappone* [...], 1870, showing two Japanese interpreters.

Fig. 8 グイド・ラバシ しだれ柳模様のシルク生地 1923年 コモ、アントニオ・ラッティ財団テキスタイル地博物館

Guido Ravasi, Silk fabric showing weeping willows, 1923. Como, Fondazione Antonio Ratti, Museo Studio del Tessuto (Museum of Fabrics of the Antonio Ratti Foundation).

Fig. 9 マリアノ・フォルチュニイ 茶色の絹ベルベットのイヴニング・コート 1910年 京都服飾文化研究財団リチャード・ホートン撮影

Mariano Fortuny, a brown, silk, velvet evening coat, 1910, Kyoto Costume Institute. Photo by Richard Haughton.

ラウラ・ディミトリオ (Laura Dimatorio)

ボローニャ大学博士課程。美術史・ファッション史専攻。研究テーマはイタリアおよびヨーロッパにおけるジャポニスム。2012年、中華女子学院 (北京) 客員教授 (イタリア美術とファッション)。2009年、PIME 博物館 (ミラノ) での展覧会「Riflessi. Incontri ad arte tra Oriente ed Occidente」を共同企画。『Quaderni asiatici』、『Annali dell'Università di Ferrara』、『Artes』などに論考を寄稿。

(※肩書は掲載時のものです)